

回顧 私と日本社会党

——伊藤茂氏に聞く（下）



社会党の「可能性」

——まず前のほうからということで、時系列をたどって質問にお答えねがいたいと思います。口火を切る意味で私からいくつかお聞きしたいのですが、一つは最初、明るさを感じ、大きな可能性を持っていたと。それで負ける気がしなかったというようなお話でしたけれども、そういう気分がなくなるのはいつごろなのかということをお聞きしたいんです。ある時点までかなり強い上昇機運というものがみなぎっていたように伺いましたが、どこかで転換したということですよ。これが一つです。

二つ目は社会党の場合、先ほど3本立てというようなことで中執、書記局、議員団ということでした。政党の場合、自民党だってそうですが、党の執行部と議員団というのがあるのが普通で、書記局がものすごく大きな力を持っているというのが社会党の特徴だったように思われます。そのことの功罪といいますか、メリット、デメリット、あるいはプラス、マイナスをどう考えられるかということが二つ目です。

三つ目は、これはかなり微妙なことになるかと思いますが、当初、伊藤さんが入られた左派社会党でずっと左派としてやってこられて、70年代の中ごろまで社会主義協会にも属され

ていた。中ごろに縁を切られるわけですよ。その理由といいますか、背景、いきさつをもう少し補足していただければ。

伊藤 社会党の未来は明るい、とにかく希望と情熱に燃えてやろうという若き日のね。どこかスッと希望が絶望に変わったわけではないですね。50年代、60年代、70年代、特に90年代の中でだんだんに。

——90年ぐらいまで、まだそういう明るい感じが続いてたんですか。いや、それは伊藤さんご自身ではなくて、周りを含めてということですけども。

伊藤 90年代はすでに転落の歴史ですね。

——いつごろ、これはもうちょっとというふうな感じになったのでしょうか。

伊藤 それと3番目におっしゃった協会と縁が切れる、あれとだいたい重なっているんです。だいたい70年代、国会議員になったこと、ならないことは別にして、ヨーロッパ社民の勉強、多賀谷さんを団長にして半月ぐらいかけて、ヨーロッパの政権を取った、政権担当のない党はありませんから、そこを回りました。

それで非常にいいことを言われるんです。例えばフランスに行く。国民会議議長のファビューズさんへの設問で、あなた方はエピネ大会で

本稿は、2013年4月7日（日）に法政大学市ヶ谷キャンパスにおいて行われた第7回社会党・総評史研究会の記録である。事前に伊藤氏宛に送付した質問に答えていただいた部分（前号）と質疑応答（本号）に分けた。読者の便宜を考え、中見出しを付した。

新しい結集をした。エピネ大会から大統領選挙に勝利するまで、何を中心に努力しましたかというクエスチョン。そうしたら、答えは1点、Intellectual advantageと。

要するにIntellectual advantage、我々がアドバンテージであるという党をつくろうという1点なんでしょうね。そういう印象的な言葉をずいぶん聞かされました。

そういうのをいろいろ聞いたり、別のところで例えばドイツに行って、リベラルと社民党について議論したら、「鮮明な理念と目標、優れた具体性と現実性」、この二つを兼ね備えなければ政権に発展することはできません。これは当たり前の話だね。しかし、そういうことを左派社会党の時代から議論を熱烈に党内でやったことはないわけです。

その節目はいくつかあったと思います。社会党はどこでどうだったか。節目というのは、例えば今言ったポスト安保の時期の問題。非常に大事な時期だった。あそこでやっておけばというのは思います。

——それで先ほど言われた構造改革論争の問題がそこに入ってくるわけですよ。

伊藤 そうです。だから、自らの反省も含め、いったい自分はあのとき、どう考えたんだろうかと。

誰かに言われたんです。だいたい社民なんていうのは軽蔑の用語と言ったけれども、「伊藤さん、あんたも言ったじゃないの」と言われるし、そういうことを含めて、いろいろと考える。どうだったんだろうか、どうすべきだったんだろうか。

89年のときもそうです。例えば4野党政審会長は合意をつくれる仲良しクラブなんです。ところが実家に持って帰ったら、「伊藤さん、悪いけれども、通らない」と言うんです。本家のほう、自分の党が。

そして例えば選挙にしても、社会党一人勝ちでしょう？ 向こうは減ってしまうわけだから、そんなもの、共闘しません。やはり自分のところが無駄足、無駄努力をしても、皆が伸びるようにしてやるという意味での幹部、執行部の責任ある意識がなければ。

それは土井さんに要求しても無理でしょう。

——無理なんですか（笑）。

伊藤 だから、チャンスではあったが、一致できなかった。そういう節目が二つか三つ、あったような気が私にはします。

——書記局はどうですか。

伊藤 これはある意味では日本的なんじゃないですか。

——日本的と言っても、社会党以外にそういう3本立てみたいな形で書記局が力を持っているところはあるんですか。

伊藤 ないんじゃないですか。あまり聞かないですね。

日本の左翼勢力あるいは日本の社会党が強まっていくと、例えば江田さんが組織局長をやった。それで組織論の大改正をやろうというので、全国オルグ制度とか組織委員会をつくるとか、いろいろやるわけです。左派、右派を問わず、皆、大賛成でやった。結局、その人たちが力を持ったわけです。

だから、党内の一つの論理としてはそういうものが存在し得ただけけれども、市民レベルか、国民レベルから見たら、ちょっと奇態な格好だということでしょうね。

——ただ、ヨーロッパの場合もウェーバーとか、よく言うのだけれども、組織政党か議員政党かという議論が、SPDでも労働党というのがあるって、そして、それぞれ最後は議員政党になる。政党になって政権政党になるという形になっているから、書記局が強いというのは必ずしも日本的ではなくて、ヨーロッパの社民もそう

いう道を経てきてやったようです。ある意味では非常に近代的なスタイルなんです。組織政党だから。

伊藤 さっき申し上げたObamianなんていう話で、だいたいスピーチライターとか、想像できますよ。そういう方々は表向きの肩書、官房副長官とか内閣補佐官とか、一切持っていない。しかし、優秀なリーダーのためには優秀なスタッフが必要だというのも事実です。

国政選挙での社会党の停滞

—60年代の終わりごろについてお聞きしたいのですが、革新首長、県知事、市長レベルでは革新勢力、特に社会党から多数当選していますが、69年末の国政選挙で社会党は大敗北します。国政では停滞する、地方では勝つという、この要因の分析をしていただきたいのですが、どうしてそうなるんですか。

伊藤 それなんですよね（笑）。いや、非常に大事な問題だと思いますし、私も何かポスト安保の時代の中で、社会党は長期低迷から長期低落に行く。革新自治体は伸びる。

それで長洲さんが出たのは74年ぐらいで、あれがだいたい終わり近く、70年代終わり、それからオイルショックですね。あの辺りで革新自治体運動もダウンしていくんですが。

—76、77年までですね。

伊藤 さきほど申し上げたように論理が違ったのだらうと思います。革新自治体の論理、市民原理ですよ。

それから、政党のほうはやはり道、社会主義の道にしたって、左派綱領か何かは別にして、党内論争の結果、あんなものをつくったけれども、飛鳥田さんが市長から委員長になる辺りに、飛鳥田さんのところに行くと、年中言っていましたよ。「道」を踏み絵のようにするのはおかしいと。

「伊藤君、そう思わないか」「本当、そう思うよ」と言って、それで飛鳥田さんが委員長になって、従来の大会直属の社会主義理論委員会を廃止して、執行部の下に理論センターをつくった。そのときには勝間田さんが会長で、河上民雄さんが事務局長で、ぼくが次長ですが、そういう意味での問題意識を鮮明にするとか、そういう問題意識を議論するとかというのは、残念ながらなかったんです。

—69年以降は、共産党は倍々ゲームといわれるように増えていくんですよ。だから、市長選挙で社共を中心とした革新市長や革新首長が出るときには、無党派革新というか、革新的無党派層がかなりいる。それで、その人たちは社会党ではなくて、国政選挙になると共産党に入れたということではないんですか。そこはどうなんですか。

伊藤 どうなんですかね。共産党も入れますからね。

五全協か六全協の辺りは本当にガタガタでしたよ。

—だから、69年ぐらいからですよ。

伊藤 不破君の時代でしょう？ 上田耕一郎君が大学でぼくの1級上で、不破君は1級下なんです。上田耕一郎君はまだ人間味があって面白かったんですが。

—まず一つはすごく単純な、これは聞き落としかもしれないので申し訳ないのですが、52年に大学を卒業されて54年に書記局入りされる、この2年間の経歴で何をしておられたのかということです。それから、私は今日のお話でたいへん興味深かったのは、消費税のときにIMFJCの……（笑）。これは秘話というか、非常に面白かったのですが、先ほど質問があった社会党の組織の特徴との関連でいうと、一般的なイメージで社会党は、やはり党の組織としてはそれほど強くなって、総評を土台にしている

というようなイメージがありますよね。

今日のお話の中に、例えば60年の安保のときに岩井や太田の役割とか、少し出てきたのですが、他に例えば総評などが党としての方針や人事などに関して、このような介入とか入力、あるいは影響があつて、そこでやりとりがあつたというようなことに関して、印象的なことがもしありましたら。

もう一つ関連して、89年に労戦統一ないしは労戦再編が起ることに、社会党の側、あるいは伊藤さんのような立場から、それをどのように見て感じておられたのかというようなことを。

あと、せっかくですから、今の関連で85年の社公合意などに関しては、どういう役割を果たされたのか、どのようにお考えになっていたかとか、その辺を少し。

伊藤 税の問題、これはざっくばらんに言ったら、労働組合もどうかと思います。例えば村山内閣のときに3%を5%にすると、ありましたね。あのときでも連合のほうは、ざっくばらんに言えば、自分たちの労働運動の春闘で賃上げをして何も取れないものだから、政府のほうに大幅所得減税しろとか、何とか言って、財源は消費税というわけです。

ぼくはだいぶ言ったんです。あのときには社公民、3党の政審会長、同じ主張でしたよ。それで連合の方々に言うんです。「あんた方、現役の労働組合の人はいいでしょう、それで。しかし、たくさんOBがいるじゃないか」。OBの方々は消費税の負担だけある。減税を受けるわけではない。もっとOBの立場も含めて考えなければならぬんじゃないかと言いましたが、いや、断固賛成である（笑）。

——組合から上げろと言ってきたわけですね。

伊藤 似たようなものでしたよ。さっきの

IMFJCと消費税の話ではないけれども、労働運動に何か一つのしっかりした社会観を持った芯が入るというようなものがないと、だめなのではないですか。

それは総評が解散して連合になるという経過。例えばいろいろいい人がいて、勲章をもらった人もいて、いろいろなお付き合いをしましたが、真柄栄吉さんが最後の事務局長です。真柄さんにいっぺん言ったことがあつたんです。「あなたは総評の最後の事務局長で、辞め方が早すぎた。ちゃんとした総括をしなかった」と。

毎年暮れに総評OB会の勉強会、懇親をやっているんです。去年一昨年テーマが「総評とはいったい何だったのか」という。講師になる人がいないんです（笑）。諸外国のいろいろな運動、南欧の場合、北欧の場合、アメリカの場合、アメリカの場合でも戸塚秀夫君などが一時書いて、古い労働組合の組織率がダウンして、市民運動的改革運動が起きて、……という本を出したりしてましたよね。

ぼくは不勉強でわからないのだけれども、日本のそういう労働運動、全体としては全然ハッピーな状態ではないでしょうか。展望を見てもハッピーな状態ではないでしょうか。なぜ起きないのかという。これは私にとっても懸案で、本当にわからないですね。

——政審でやられたときに、労働組合からいろいろ注文をつけられたり、何か言ってきたりということはあつたのですか。政審会長とか、政策をやられていたときに。

伊藤 労働組合の方々とは定期的な意見交換の場を持ってやっていますから、労働組合との意見交流は予算とか税制とか、政策面とか、いろいろあります。しかし、消費税のときのIMFJCは正直言って、きつかったですよ。だいぶ言われた。

いや、わかっているんですよ。本音をはっきりは言わないわけです。20%の物品税が3%になるといったら、会社は大もうけだし、労働組合もその分け前が取れるというのがあったのでしょうけれども。労使一緒になって、基本的に会社の労働組合ですよ。

——社公合意はいかがですか。

伊藤 社公合意はあのかのときの担当は、政審会長が岩手の北山さんの時代ではなかったかな。あれは北山さんの好みと趣味があったんじゃないか。

——伊藤さんはあまりかかわっていなかったんですか。

伊藤 かかわってなかったですね。

——いま労働組合の話があったので、二つですが、一つは総評・社会党ブロックというのがあったと思います。次第に総評が官公労中心になってきたということで、社会党としてどう、その中でもいろいろ問題を抱えていたと思います。70年に辞められたことも含めて、苦勞されたことを聞きたいのと、もう一つ、民社党的ことを聞きたいんです。

社会党の分裂

民社党は60年代安保の前（1960年1月）に社会党から分裂しましたよね。私はその後の民社党の政策をみると、まずなぜ一緒だったのか不思議ぐらいで、全然、水と油の政策の違いがあるんです。安保にしる、憲法にしる、核問題にしる、民社党をどう思われるかということですね。その二つを。

だから、官公労の影響みたいなものがあつたのかということ、それから……。

——官公労との関係と民社党をどう思うかですね。

伊藤 やはり社会党の時代、それから社会党・総評ブロックが強い時代は、官公労のウエ

イトは大きかったです。

——やはり選挙への対応と、そういうことの意識はありましたか。選挙の、例えば地区労なんかで……。

伊藤 そうですよ。

——あまり強く言えないというか、逆に。

伊藤 人も金も出すというね。ぼくなんかはその意味では非常にハッピーで、飛鳥田さんが横浜市長で、市長の名前は子どもでも知っている。それから長洲さんが知事をやっていて、いろいろな労働紛争とか、左右を問わずで、あそこは電機も自動車も多いところだから。

——制空権を掌握しているようなものですよ。

伊藤 だから、選挙でも通るのは当たり前だね。

——一般的な政策的には距離があるけれども、人的つながりが強くあつたと。

伊藤 かもしれません（笑）。

——民社党に割れるときには国民会議の事務局次長をされているときで、伊藤さんにはあまりショックには映らなかったのですか。印象に残らなかったのですか。

伊藤 いや、そうなっちゃつたなあという感じだったでしょうね。結局、そうなっちゃつたなということでしょうね。

——結局なつたということは55年統一して以降、あまりしっくりいかなかったということですか。いつかはそうなるという予感のようなものがあつたのですか。

伊藤 そうですね。やっぱりちょっと異質なんだという気持ちはあつた（笑）。

——そのころは、伊藤さんは左派のほうにいたわけですよ。それで、つまり民社党になって出ていくような人たちとの付き合いみたいなものは、当時はなかったんですか。ほとんど没交渉ということですか。

伊藤 だいたい個人的な人間関係じゃないですか。個人的に仲のいい人は仲良くやっている。

——社会党の低迷については、70年代の長期低落ということもあるのですが、実際、その伏線は民社分裂が一番大きかったのではないかと思うのです。

伊藤 若かりしころは左派精神でいたから、だいたい左右、左派社会党、右派社会党、これはやむを得ないだろうという程度に。それから、政治家として、いろいろな行動をきちっと責任を持ってやるようになってから、政権担当のためにはお互いに突っ込んだ議論をしてみとめていかなければならぬという論理で、私としてはやってきましたからね。

それをやるためには、人間的な信頼も政策的な調整も、そのバックグラウンドにある労働組合の関係も、それからお互い選挙に勝てるという調整を含めて、いろいろなことをしなければならぬから、これはやはり党としてまとまって取り組まなければなかなかできない。それは個人でできません。なかなかそういうことまで、社会党から社民党へという経過の中ではできなかったというところですね。

——社会党と民社党の基盤はもちろん総評と同盟だと思うのですが、その同盟と総評の一番の違いは、企業別の労使関係における、ある意味で相互信頼的労使関係という労使一体的な考え方をかなり強く持っている同盟と、まだ建前上は階級闘争を持っている総評というのがあったと思います。そういう中で支持団体の労働組合でそれだけの距離がある。

政治の上ではもう少し近かったのかもしれませんが。もちろん建前と本音は違いますが、例えば地区労の人が一生懸命、社会党を応援する。地区同盟が一生懸命、民社党を応援するとか、そういうことが起きていたわけですから、それ

を一緒にするというのは非常に難しい。かなりの違いが、労働運動をやっている側からすると、民社党と社会党は、特に協会派がいる社会党はかなり違うという認識を持っていたのですが。

伊藤 分かれて当然ということですか（笑）。

——そうです。地区労も、それは宝木論文のことであつたけれども。

伊藤 昔は明瞭な対立だったけれども、今はほとんど同じでしょう？ 今は官公労にしても民間にしても、似たようなものじゃないですか。

——官公労対民間ということ。

伊藤 個別に、例えば今の段階でお付き合いする範囲を見ても、旧全通と旧電通と、今はだいぶ違うとか、それならわかります。しかし、労働運動の基本が問われているでしょうし、民社党も社民党も同じですよ。

——高野実という政治家というか、総評事務局長がいましたね。彼と、例えば飛鳥田さんとか、伊藤さんとはどういう関係というか、どのように見ていたのか。何か印象に残ることがあったら、教えていただきたい。

伊藤 私は全然関係ないです。

93年以降について

——2つお尋ねします。1点目は93年の総選挙のときで、当時、私は大学生で記憶にあるのですが、宮沢総理が解散して、その後、しばらくして、新聞のかなり大きい2面ぐらい使って、山花委員長と羽田さんなど、他の野党の党首との会談みたいなものが載っていました。

その中で山花委員長が社会党は他の野党と協力して、選挙が終わったら、羽田さんを総理大臣にして社会党は支えるんだということをその「対談」で述べて、その後、自分たちが総理大臣を取るぐらいの気概を持ってやらなければだめじゃないかとたたかれて、赤松書記長が、

「いや、山花首班というのも考えています」等々、かなりゴタゴタになってしまった記憶があります。

過日の『朝日新聞』の夕刊（2013年4月1日～12日に連載「人生の贈りもの」）でも村山元首相のインタビューで、やはり93年総選挙のときに社会党は主体性を持ってやらなければいけないと言ったのだけれども、山花さんは小沢さんにもうベツタリになってしまっていたみたいなのを言っていました（4月4日付）。93年のときに結局、羽田首班で社会党はいくと早々と決めてしまうことに対して、社会党の中でどういう議論があったのかというのが1点目です。

2点目が、社会民主党になった後に伊藤さんがオリーブの木「資料集」を出されて、私は社会新報でその記事を見て、「ああ、これはいい」と思って、社民党本部に電話して家まで送ってもらって熟読したんです（笑）。その後、新進党が解散して、かなりの人たちが民主党に行く。そのときに社民党も、オリーブの木で行くんだったら民主党の中に入っていくというのも一つの選択肢としてあったと思うのですが、そういう議論が社民党の中であつたのか、なかったのか。この2点について伺いたいと思います。

伊藤 結局、93年選挙のときに、非自民の中では社会党は70で与党では第1党なんですよね。ところが、非自民の政府をつくる政治的なアクション、この面では小沢さんとか武村さんとかが中心で動いたわけです。社会党は脇役だった。ですから、数の面では非自民の勢力の中では社会党が第1党だった。しかし、内容、政治行動としては脇役になってしまった。

したがって、あの時点で実際には数は別にして、長年にわたる、約40年弱にわたる野党第1党としての立場を失ったのであり、そして

55年体制は終わったのです。政治論としては、そうではないかと判断していいのだらうと思います。

いろいろな意見がガヤガヤあって、結局、山花、赤松、執行部としてはとにかく入閣をします。入閣をするのに、今でも疑問なのは、なぜ政治改革と自治大臣と、自分たちが進んでやらなければならないのかというのは今でも私はわからない。基本的には年功序列ではなく、シャドウキャビネットメンバーを出そう。これが筋ではないかと。あのときに年功序列で人を出したら、これまた恐らく大変だったでしょうね（笑）。

オリーブは、オリーブ勉強会を提唱しまして、村山、武村、鳩山、菅さんなども含めて、勉強会に来てくれました。鳩山さんは1回しか来なかったけれども。それで加藤紘一幹事長からだいたい愚痴を言われまして、文句ではないけれども、自社さの連立政権の中にいるわけです。その中で幹事長だった。とにかく「伊藤さんは自社さで、これ、オリーブ連合と言えないこともないんじゃないか。何であんな別のものをやるんだらう」ということを、加藤紘一さんは言っていましたね。

——今あるものでいいじゃないかと。

伊藤 そうだと思います。しかし、何か私自身の気持ちの中では自民党と手を組んだ形で、あるいは自民党の恩人となるような立場でものをやるというのではなくて、何かこちらのほうの筋の通った何かをしなければならぬ。革新的な筋の通った連合を考えることは必要であろうということで、立場としては自社さの中ではそういうアクションは異端視されるのでしようけれども、あえて……。

——この場合、それは自民党を外すということになるわけですか。

伊藤 そうです。だから、自民党は誰も呼ん

でないわけです。それで、鳩山さんも菅さんも来ているんです。村山さんも武村さんも勉強会に来てくれました。

村山内閣の政策転換と防衛問題

——村山内閣の政策転換で、急に自衛隊容認、日米安保堅持を打ち出したことがありますが、事前に何か相談というか、党内での議論はあったのでしょうか。なかったかのように報道されることが多いのですが。

伊藤 いや、組織的に議論したことはないです。ただ、村山総理がどういう答弁をするかということは、官房長官室であるときには4～5人集まって、夜遅く、いろいろな相談をしたということは聞いています。あのときぼくは呼ばれなかった。ぼくは沖縄問題担当であったけれども、呼ばれなかったですよ。

それで、あのときの衆議院の本会議の議場の風景でいったら、村山さんが自衛隊合憲、安保堅持論を答弁する。自民党席、満場の拍手。社会党席、腕を組み、寂として声なしという状態です（笑）。

それは、政権を本気になって取ろうと、あるいは総理大臣を出そうというからには、本当は政党としてはちゃんとしたピースメーカー・システムです。現実からスタートしなければならない。こんなことは当たり前です。現実無視というのはできないですから。どこの国でも、今の日本でもそうだけれども、現実からスタートして、どのようなことをやるのか。

安保反対とか自衛隊違憲とか、何がどうか、非武装中立もそうかもしれないけれども、スローガンと並べるのではなくて、必要なのはピースメーカー・オペレーションなんです。そういう政策論をどうつくるのか。今の北朝鮮の問題もそうです。

93年、94年の北朝鮮核疑惑のときはとても

緊張しました。ペンタゴンが赤ボタンを押すと。要するに細川だったときに言われて、それで防衛庁と外務省と官邸と警察とが毎晩夜中に協議を続けるんです。海上保安庁が入っているんです。海上保安庁の責任者は総理ではなくて運輸大臣ですから、場合によっては社会党大臣が責任の一翼を担って、戦争状態になるということがあり得るわけです。

あの時、アメリカ側から100件ぐらい要求があって、全部極秘だったから廃棄処分としましたが、いろいろな議論をしました。忘れがたい思い出ですよ。

ああいうようなことも含めて、今もそうだけれども、スローガンだけ言っているような政党ではだめですよ。特に朝鮮問題を見たって、93年、94年のあのとき、北朝鮮核疑惑の騒ぎ、「ソウルを火の海にしてやる」と言ったとき、ペンタゴンは軍事行動を決定したわけです。やる寸前だったわけです。その中で社会党大臣としては、非常に苦悩したけれども、党に持って帰って、人さまに相談するわけにはいかないですから。秘密事項ですから、その真実を知っている人は数人しかいないんですからね。

だから、自分の責任で決めなければならないということです。個人的には非常に苦しみました。しかし、やはり非常に貴重な経験をしましたよね。

——国家安全保障会議でやるということを最終的に決める議論をしていたときに電話が入って、カーター訪中の方向が決まったと言われていますが、そのいきさつはご存じですか。

伊藤 いや、知りません。いやあ、カーターが行って打開して、本当にホッとしましたよ。あのときの段階と今、当然、また次元が違うから。構造も違うしね。あのときにはペンタゴンの責任において、核施設を攻撃すると決められたわけです。

—かなり日本にも具体的な要請があったんですね。

伊藤 あれは第7艦隊から。在日米軍ではなくて、ペンタゴンの決定なんです。それをめぐって、細川がどうするんだと言われて、米軍から100件言われました。それを50ぐらいに絞って、絞った中での最終リストの中には全部、「極秘、閲覧後焼却処分」という判子が押してある。

—100項目ぐらいの要請があったということですね。

伊藤 それを削って50ぐらいにして、それでも緊急立法とか、超法規というのがありました（笑）。例えば北朝鮮から武装した難民か何か知らないけれども、日本海にワッと来る。原子力発電所に来るとか、いろいろなケースがあり得るわけです。機雷処理とか何とか、超法規という、あれがありました（笑）。

—超法規的行動を取るということですね。

伊藤 それ以外にないと。しかも、海上保安庁も参加をする。当然ですよ。その責任は自分にある。それで党内、社会党の中で土井さん、村山さんに「大変なんだけれども、どうするか」と相談するわけにもいかない。閣僚の1人としては、自分で決めなければならないという立場ですからね。これはルールですから。

—そのときは防衛庁長官や外務大臣とも連絡を取り合うわけですよ。そうでもない？ それはまた別個のルートでそちらには入ってくるわけですか。

伊藤 防衛庁の何とか局長クラスとか海上保安庁の長官とか、そういうのが毎日、会議をやっているわけです。相談しているわけです。

—じゃあ、運輸大臣は。

伊藤 保安庁の長官と話した。

—かかわるところだけということですか。

伊藤 そうですね。長官と話をして、だいた

いの全体の討議の模様などは、保安庁長官から毎日報告がある。

—安全保障関係閣僚会議には運輸大臣は入っていないんですか。

伊藤 入っていないんです。

—4月あたりが一番危なかった。

伊藤 とにかくアメリカとしては、本当に困惑したでしょうね。

—94年。

伊藤 日本の政府と話ができない。話し合える状況ではないということだったでしょうね。

—あのときに社会党のほうから、例えば朝鮮労働党のパイプなどを利用して事態打開に積極的に閣僚クラスを訪問させるとか、何かそういう考えというか。

伊藤 そんな政治環境は当時の与党はなかったですね。

—北朝鮮労働党と社会党とのパイプはなかったんですか。

伊藤 皆、目の前のことで頭がいっぱい。いま振り返ると、なぜカーターか、日本の政府は、日本の政治家は？ ということを実際に考えなければ、と思います。その中に苦悩する社会党大臣が1人いたわけです（笑）。

—党としても独自に対応するようなことは全くない。動けない。

伊藤 ないです。あのときにはピンチでしたよね。いや、あれで元大統領が訪問して片付いて、ホッとしました。本当にホッとしましたよ。それで保安庁長官と毎晩いろいろな話をして、そのときに言ったのは、当時の社会党は、とにかくPKOで部隊を派遣する場合も引き金を引く決定は隊長が命令しない、と。隊員自身が生命の危険を感じ自ら身を守るためにやる。

—正当防衛としてやるという。

伊藤 やるんだということを社会党は言ったんですよ。あれだけはやめよう。とにかく保

安庁職員が引き金を引くということがあった場合でも、万々一、そういう事態が起こっても、すべての責任は長官、おまえとおれが責任を持つ。社会党のあの議決だけはやめようと。これは男の約束と言ってね（笑）。士官学校だから言うわけではないけれども、いい男だったです。いろいろな議論をしました。

いや、社会党の大臣が日本海での作戦行動に参画をするとなるかもしれない。「社会党大臣としては、おれはとにかくきつだよ」というような話を言いました。そうしたら、「大臣のお気持ちはよくわかります。しかし、万々一、その事態が発生した場合に日本はどうなるでしょう？」「わかった」と言った。

あのときの書類なんていうのは全部処分したんだろうね。全部焼却した。

飛鳥田さんの思い出

伊藤 飛鳥田さんの思い出でいくと、ぼくはさきほど申し上げたようにエピソードを含めて、市長・飛鳥田一雄あるいは委員長・飛鳥田一雄よりも、人間・飛鳥田一雄の思い出が強いです。

お亡くなりになって弟さんから聞いたのだけれども、彼は中学校のときに体のハンディがあつて東大には入れないと。東京帝国大学は身体障害と女は入れないですから。それで将来がないとグレてしまって、中学校のときに不登校になって、それでおやじさんが弁護士で、さんざっぱらいろいろなお金を使ったり、苦勞して、明治大学の2部に入れた。そこで非常にいい友人ができて、お互いにハンディがあつてもがんばろうということになったという。

飛鳥田さんご本人から、そんな少年時代に不登校になった悩みとか、そんな苦勞はいっぺんも聞いたことはないけれども、そういう話を弟さんから聞きました。弟さんもお亡くなりにな

りましたがね。

だから、人間・飛鳥田一雄というイメージと思い出が非常に強いですが、いろいろな飛鳥田さん自身のお付き合いとか、何がどうかということとはあまり……。

——江戸っ子ではないのに、江戸っ子みたいな人だったと言われてますよね（笑）。

伊藤 そういふ面もあるかな。とにかく人を明るくする。例えば「断固けしからん。市長に文句がある」と言って、市長室に行く。出てくるときには皆、ニコニコしている（笑）。

そういう人柄、同時に一面は非常に孤独でした。だから、選挙のときに市長選挙がある、ポスターをつくる。写真をいっぱい撮る。選ぶ。それで選挙事務所「ああ、これがいい。にっこり笑っていい顔だ」なんて、本人は嫌だという。

それで最後にもうしょうがないから、本人がいいやつに決めればいじゃないかと本人に選ばせた。どこかに孤独の表情が見える。人間というのはそうかもしれませんが。

——もともと市長になりたくなくて、やらざるを得なくなってしまったわけですね。

伊藤 そうですね。

——その後だって、委員長になりたくなかったのに、やらざるを得なくなってしまって、結局、何か貧乏くじを引き続けたんじゃないですか（笑）。

伊藤 側近の方々も「最後まで断固、委員長になりたくなかったんだ」という説と、「最後にはやっぱりやりたかったんだろう」という説とありますよね。

ちょうどぼくが選挙に当選をした1年目のパーティーをやっている日なんです。成田さんが来て市長室に座り込んで、「イエスと言うまで帰らない」と言った。

——そうですね。それもあつたのでしょうか。

だから、あまり報われなかった人。

伊藤 そうですね。

派閥，指導者，歴史について

——伊藤さんの派閥の関係はどうですか。勝間田派だったと言われてますよね。

伊藤 ぼくが尊敬するのは、今、あの人は立派な人だったと思うのは和田博雄です。やはり『幻の花—和田博雄の生涯』上・下（楽游書房，1981年），不思議に、あれを書いたのは農林省に前，勤めていた人なのだけれども，著者は和田博雄さんにいっぺんも会ったことはないんです。しかし，俳句も含めて，和田博雄さんのことを非常に上手に書いてあります。

勝間田さんはまあまあです。石橋さんは石橋さんなりの生きざまですからね。彼は辞めるときに、『「五五年体制」内側からの証言—石橋政嗣回想録』（田畑書店，1999年）という本を出している。これを読んでみても，人それぞれ，生きざまがあるんだなという感じですね。

しかし，立派な人だったと思うのはまず和田さんです。俳句を見ても，彼が辞めるとき，冬，醍醐寺に行って，「幻の花散りぬ一輪冬日の中」という句を詠んで引退しました。また，「冬夜の駅」の句もそうだし，企画院事件で牢獄につかまったとき，セメントの部屋の中でじっと正座しているときの俳句とかね。

中曽根さんも，若いときから総理大臣をやっつて辞めるまでの全俳句集を出して，電話して「読みたいのだけ」と言ったら，送ってきましたが，中曽根さんのあれは気取りがあつて，中曽根流だね（笑）。やっぱり和田さんが好きです。

——人物評が出たついでですが，政審会長として田辺さんと土井さんに仕えたというか，そういう形になりますよね。土井さんと田辺さん，いかがですか。印象としては，どんな感じですか。

か。

伊藤 どうですかね。土井さんのときには，冗談で，党に入つてはひたすら女性委員長にお仕えし，うちに帰ったら女房に理屈を言われ，一人息子は年中，かあちゃんの味方ばかりする。国会に行つても2対1，うちへ帰つても2対1，どっちでもいいから多数派になりたいと言ったんです。

土井さんから電話が来ると，うまいんですね。だいたい「私，政策，全然わかんないんだけど，伊藤さん，ちゃんとやってくれるから助かっているのよ」。何がどうとか，うまいことを言うんですよ（笑）。女房も土井派になるわけだ。

——田辺誠さんはいかがですか。

伊藤 ビジョンポリシーを持った人という感じはあまりしませんね。ただ，彼は村山さんが先に委員長になり，総理になり，いろいろあつて，気持ちはあるんじゃないですか。まだお元氣ですけども。何か本を出されているでしょう？村山さんとか，細川さんをはじめ，岩波で出しているのを見たら，何で岩波書店があんな本を出すんだとぼくは思うけれども，全部きれいな事ですよ（笑）。

立場上もあるだろうし，そうは言えないだろうけれども，例えば村山さんが出されるのなら，自分は党の責任者として，あの状態，転落をしていくと。自分自身はどう思ったのかとか，そういう気持ちがどこかで表れていなければ。

あれがそうですよ。瀬島龍三さんは陸軍士官学校の大先輩ですから，ちよくちよく遊びに行ったりしましたが，瀬島さんが自叙伝を出しました。一番先に読んだのは，東京裁判でソ連側の証人として出廷をする。そのときの気持ちがどうだったのか。確かソ連側証人で元軍人が3人出て，1人は日本に到着した晩に自殺してしまふんです。書いてあるかというのと，何も書いて

てないです。ああ、だめ、これと思った（笑）。

どこかそういう何か悩んだ気持ちの片鱗が表れるようなことを出されたほうが、ぼくはいいと思います。

しかし、土井さんも今はたいへんお気の毒な状態ですから。

——結局、64回大会で党名が変更されて社民党になったわけですね。実態は変わらなかったというお話ですが、その後、ヨーロッパでは社民党政権が花を開く。日本では今日のような状態になってくるわけです。どこに違いがあったのかということですが、いかがですか。あるいは、このときも含めて、どうすれば、こうならなかったのかということですが。

伊藤 いや、歴史と努力経過において、一回り、二回り違うということではないですか。

山川均さんはだいたいまともを言っていると、今でもそう思います。『社会主義への道は一つではない』なども含めてね。だいたいいい論文を書いている。

ただ、ヨーロッパ社民で結局、今、サードウェイだの、ノイエミットだのという時代をどう総括するのか、なおガヤガヤ議論している。21世紀の時代における社会民主主義の価値というものはどこにあるのだろうかということも議論している。

向こうのほうは国境を越えて、さまざまそういう議論を一生懸命やっている。できがいいかどうかは別にしてね。そういうことは日本にはない状態ですから。日本では真っ当な議論はな

いですから、えらいと思います。

ただ、実際には非常に苦しいでしょうね。この間、ヨーロッパを回った学者の人に聞いたのだけれども、例えばドイツで一昨年暮れに、赤赤緑のシンクタンクができた。何かシュレーダー的赤とラフォンテーヌ的赤と緑と、次の時代に生きる共通の。

——社民党と、赤というのは左翼党。

伊藤 そうです。できないだろうかと。そういうトライをするんですよ。それで、その後、どう見ているかとある人に聞いたら、「いや、目立った動きにはなかなかない」と言っていました。何か非常に民主党も社民党も含めて、そういうものが基本的に問われている。原理がね。そうではないでしょうか。

——新しい試みというか、そういうものにチャレンジするという。

伊藤 そうです。ただ、ヨーロッパの場合には、日本と比べて、そういうものについて、何か議論を起こそう、何かしようというのが年中起きている。コンパスグループの提案がいいのか悪いのか、いろいろな議論があっても、いろいろなものが起きている。日本の場合には起きない。

ぼくは歳をとっても元気でいるせいとか、何か知らないけれども、日本民族は決してレベルの低い国民ではないから、何か新しい次の時代というものを開くであろうという気はします。そうやってほしいと思います。

——ぜひそう望みたいです（笑）。

（完）